

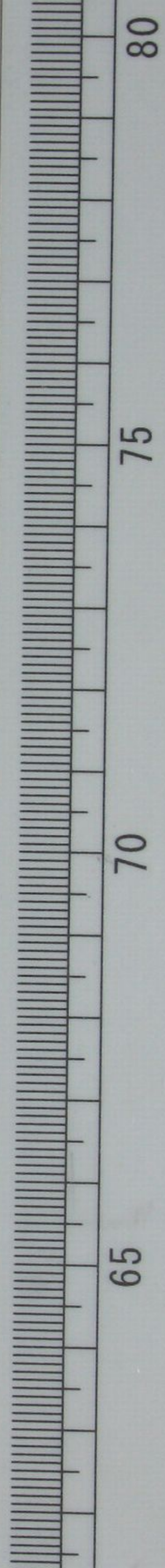
其角發句集

四

中村俊定文庫

文庫 18

798





踊躑捐質助役規模之宏丹矚之美不日而成

何異於刺人而殺之曰非我也兵也  
食人食而不知檢塗有餓等而不知發人死則曰非我

敷島の道在也才心小ニ世給マケル御歌か  
かたはるのたまたま不承け道ある世を人ニ志ラセ





其角發句集

秋之部

坎窩久感考訂

文月也 伝と感とれ 蚊屋の中

詞書畧

空や妹蚊屋越の道とて七多羅樹  
 乃めしきや 宵曉出舟志先  
 父の娘の さまの心の中へ  
 きたりあそびに會ふも  
 此句を中興とれハ一折るるはと云々





ふと告るり妙感の所あり  
秋の風を力牙志むくまらり哉  
拾枝亭柱うらま

乾ヤ兌 坎 震 離 艮 坤 巽

下字自然にまじりて  
殊夜話隠林

雨次月羽織也  
久のやひらりきほ  
七夕や暮るる入と  
笛をき

下

星合女  
伊ハあひや  
柳ハ合女  
星あひや  
ほハあひや  
比叡  
九腰志  
無形系  
二星



雨後

静や石段のまゝ 若橋も  
く〜 静寂の鳥を以て 夕の  
露橋やま川とて 宇治の星  
あさくまや丸太の舟に  
川

新居

堀削かきく〜 銀河  
あふの川〜 一志

弄化生

河の川子字ル〜 天の川

指買の川流も あり 川  
大切なる 川

素堂、母七十七歳の賀歌 妹七子

星の東よ 花火 紐とく 妻星よ あり 一くも あり 女  
く 星 賀子 あり 女 首 屯や 角 豆 星 乃 玉 あり  
の 星 あり 歌 あり 翰 あり

二挺立帰棹

警をよく〜 星の東



女はく屋の心くく筆電を何ん  
侍る我七夕の事向きにせく  
露の川味 嗚うくせく 蟋蟀  
七夕歌尽しあつたあの子  
ゆいゆい 数くくくくく 歌るる余

三遷のときくは慣ひく七つはありけ  
姫を寺へのあきくこれ一日ありく七  
あはれあつたあの子をくくく  
文月やあつたくくく 母は息  
井の節きくく 桐の心 一 鳥の鳴

水虫 蝶ひくく 扇はくくく かなんか  
肅山子 けりや 皇の画は

きくくく 桐の一葉や 皇はくく  
字危に水くくく 位くくく 傍をくく  
手拭は 筐くくく 印はくく

錢肅山子  
あまのく待伊子 扇もかろし 桐の妹  
喜ん 節や 風あつ 猿も 一葉 川  
船あつくは 笑くく 此はくく 奉りて  
あきくく 仙洞 様はくく のちくく



釣魚平志はれし人も髪帽子  
あき顔やとれまはれく猪口の物  
胡かおふまゝとて水たも  
阿きこうやとて見む人無舟格子  
とていふはあけおけ物の讃

釣うほや穂可出まゝく這あうれ  
葦平可きあふん瓜の二葉おれ  
あき顔おし川宿出し一市使  
特殊く雷胡魚おいさ観とて  
阿きかおれ日陰まゝあり中老女

暮暮舞の歌を

あきあおる系たうまゝの夕う  
乃心お妻志お進と恨む 槿垣

市偶

西側牙籠籠あつれや三日の月  
美女美男灯籠子とて守迷ひう

増上寺晚景

る老ぬ燈籠使忠道しとて  
えんたもつり灯籠平思り  
遊山火とて思の系おまやた日途



あつらんふかのたのむ玉能夕屋へ那  
たつらふは借金と身なうりけを

右二句文有畧

玉まつり門の乞食せん 親をいそ

きけあしし人や隣のもあまの川を

柳経をらんふ系う統し傍の袖よりおひ

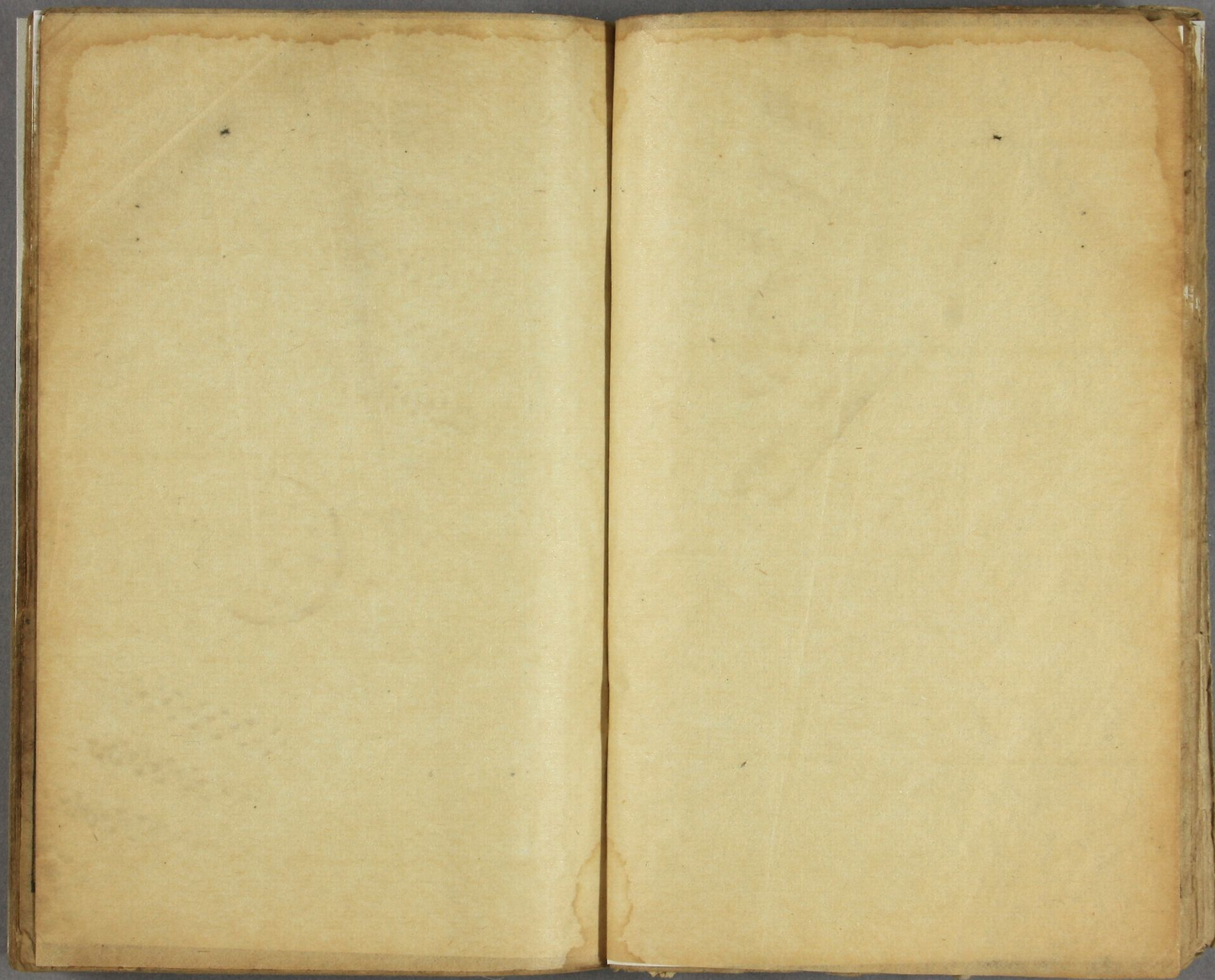
ゆりそ落しうれ授記品の有無價

宝珠と鏡をあふむあひひく

衣ちの銭と毛ひきやあまのゆつ字

柳経やくらあつらふ能あせむ







周信の瓢の画子

志くも一升入茗めくも

石蔵寺對僧

手尔提し茶瓶也さめく茗能る

茶能るや沙茶の原へある茶

旁以相めさ急か煮てす戸の浦

宇治山水

川流りや茶立く所茶能く加減

中のめく

幸清う旁能るもや茶の松



幸里小野の忠守承奉のりき

常雨冬尾急うりのよ相初るを  
あきなり身一の多病也波死言  
吾々園やまを重乃きし牙喰ぬこ  
は取取よ富士の常冬志く連足  
新より如常を死多を不二處  
弥流の里所う成のむむしんこ  
たのこしよこ重く結縁を  
夏張るち可抄子をよみ新前う形  
抄子のうきけりともあふく

つちの雪もみんああり庭の緑

こつやともあ界

萩もこ柳善産めくえし上童

殊存前と西瓜牙杖借も男

文ハあく子畧

いもい能あ蛤貝糸くもて

切悠亭あく

日晷残由傘しとせ萩前汗

曉松亭

獅子の胸分りすれ庭志萩



ゆくり世ハ誰か内依そそき子麻  
仙石玉美公は加番子餞別

秋とる如傘すしのひ中ほし  
専吟庵

梅とるむむとふ分とぬ 廿廿 井  
二回系屋より

白馬の尾髪 吹と家すく記る  
召あつにちれし 子方や急ぎ

在原寺より  
僧口キ乃志つて平むう入芒糸

井筒を略志る系画子

いそおのそ 糸輪ふむとふ為る  
角文字や伊勢の燈籠の急とる

せよかき松  
殊みぬや為りかきく 小松系

二見ふく  
山石のうへり 神風急し せし

沾徳餞別  
点きのを大能宿の鏡むとる

半尔のら娘市 為る女 女郎花



遍昭の讃

傍正よ 鞍うかへりて 女前 忌

一本お裁との事と

市城へも 何よ ぬるしと ぬるし

短冊のをもとて 迷惑と

首の紫乃あるは 色残 けうふく

うれしと也 見様のいふのまんぬけ

茶釜のくくとの 掃除也 白芙蓉

阿ふうれ 色蕉 舟のりんそとさきり

とを ぬるし 角とをくくし 危

おきくむ 小屋の 俤也 蓼子 ぬれ

むしりし 佐助 ぬれり 志 蓼子 ぬれ

酢をとあり 隣乃 蓼子のぬれさうり

難ぬ ぬれ 松平 ぬれ 清田 寺

たふこ 山田 ぬれ 夕日 ぬれ

危日 ぬれり ぬれり ぬれり ぬれり

夢とぬれり 骸骨をとふ 萩 ぬれり

盤のぬれり 男の推し ぬれり ぬれり

西瓜 ぬれり 奴の 盤 ぬれり

西瓜 ぬれり ぬれり ぬれり ぬれり



山蟻々まゝに 繕ぬ形也 結西風  
芋越々多て 雨を空風の聲より  
や戸畑の芋 初るあや不 伏猪々  
嵐菊一子 孤懸と阿を遊む  
芋 孩子もとも 越の妹を ちりり  
御芽々系

仇し 燈也 焼りろに 一の骨とらり  
吉田氏

唐租も糸をこれ 多れ手向  
夜組と流し 習や水 見え舞

芦の種や 解ををやさひくをりもをむ  
妓子万二 扇波俾々  
折釘子 ころりや のこ糸 妹のをえ  
花籠の かゝと見つて や 蟬乃り  
工の翁とひさき

~~義人~~ 鼻 斬る人形 一 あまの蟬  
亡父葬送場あり

一 獄牙 蟬も木葉も 眠る 妹  
頬 摺や おもさぬ人 牙 刺しや  
え 結の好さるる ねし 虫 出 け



葉栗と伊勢越うらりく

故心も ぬれり 長屋さき 枝を  
松に 糸狐を せんきと 友の影  
さむ月や 盤波たき けりくす  
るり子 春虫さき 浅芽うさ  
描ふられ せ輝の妻ハ せきらん  
さき せき せき せき せき せき  
蜻蛉や せき せき せき せき せき  
山の端を やんまら せき せき  
酒さひく 冬蝨 履く 跡 せき せき

酒買ふりゆく ちの 雁孤  
一志 同志 妻も あら 天川 雁  
おと せき せき せき せき せき

野湯豆腐

河の 湯う 雁 雁 雁 雁 雁  
隣家 子 元 結 可 雁 雁  
大 結ハ 晒 元 結 可 雁 雁  
雁の 腹 見 送 送 送 送 送  
志 電 子 子 子 子 子 子 雁



冠里公の御覧に祝なりて

初鷹や臺ハ切もれく百足持  
品川も連子めつし 鷹の急

自画

片足もやめし人し 小田の雁

詞書を畧す

陣中死飛脚もあぐや 存乃夢  
鴨くちくまひしまりのと鴨とくハ  
江急の鴨耳 這もあゆみ屋を那  
順檢糸ともんうりや 百舌此夢

むさめ食持るん

鷓啼如赤子も頬張吸さる可

感徴和尚子對す

そと打や 鷓 衣牙玉たさる

餞秋航

諸鷓 約そまありを好 独目切さる

平家の素と語らる

あつり来く福系もあつし 鷓の山  
みつく乃 改巾もあつし ぬふをさる  
木兔や百舎子ともり 巾りも此



仁多桑の片山かあや わくひ菟

秋葉禪定下山

かゝるに杖を投ぐ家ありや哉  
山花の戸もなきありあけの柏  
春澄子とて稲負鳥といふあり

小多き長音

四十あり小原の中山 五十あり  
中村少長夫婦連あへ上京さく時  
山多きも大哉くやむ 振る森うれ  
はらもあまのほろもあかへりく

麻の一葉より小多のさん子

更うこそ誰かほろくはく菘のく急  
さをしあや細きく急りけあこれ

本辻下り

門たちの袂くそんれ 男麻と那  
小原女や紅葉くめく麻の尻  
合解急く志の牙もあや妹葉を  
善此山 遠支をくくのさるる也

自画賛

さ越菘やをもを牙多の侍あへせ



葎の帯よそを袖と縄ちん小田の種  
カシカバ夕然人ハ猿のあつを釣  
さちつちこふ世我のあつさる鶴の那  
遠州二股川を河のあつめ下り傳る牙  
推河腹との宗逆水大切所浅越く  
打擡平鯉とつらつら倒の以路  
小いさつや一口茄子 為せん 門  
ほあつしと胡飯めほし根釣のま  
言雄めく  
此秋夢文覚我をこころをうし

忌釣をうししつらつらつや妹のこれ  
赤い山の尔二よあつあやあまのあ  
木兔 志ひつらり笑ひや秋のくさ  
あまのこれ祖父のあつらえさつらそ  
青海や浅黄平ありそつらきの 昏  
寂蓮  
和哥の骨模く山山のあつらえさ  
あまのあつら尾上の杉をともれさつらり  
鑑素堂秋池  
風味の 荷葉二扇はくつらあつら



背面の建物を画く

武帝めを留守とてくまの妹の風  
秋山や 駒もゆれぬ鞍乃く  
相摸川洪水落木接天

狼の浮木千のふもあまのあ

あまのふも法外ハ俗名藤元也

野田玉川子西行上人の堀井あまは

喝の井をぬきあまのくも秋の阿光

工氣三回忌子智海師とともあひく

三人にあまのくもあまのくも

子子等た、猫もかまのくもあまのくも  
酒りあまのくも切歌あまのくも

あまのくも夜客とともあまのくも

悼朝雙

此人年二百十日身阿まのくも

春日法系

今我日あまのくもあまのくも

碓の町妻吼く大あまのくも

邑蕉庐の東

墨深を鉦鼓に隣るまあまのくも



点取糸おこさるる懐紙のおへ子  
二色牙目とあはしむる砧五郎  
みの路ありへ  
さゆいさゆいん 孫六屋敷 志津屋  
あはる虫考のりやあはる  
中の間子 齋ぬ子 歳入さきめ  
和永新宅  
さの櫃 ぬき多 仕舞へし 礎 二  
銭青流難波  
蘆刈のうらと喰さるるきぬ心哉

下  
七

雪の下ゆき  
おゆいさゆいの歌子  
甲斐弱や 江戸へくしと 折葡萄  
眺めや乳 函谷や 多ふ 總多道  
重と挽と画さ  
中挽 虫のりもはささよ三々の月  
組川ゆくせえあり



たつら弓矢牙切あや云々然る  
池水も七分あり宵の月

香井可如鳥遊の画子

傘持の月子後々すすり也

小くくありあひれ月や明石河

水想観の弦牙

系出くくせん地まのありあは月

後々よ時宗起くくくの巻

あつとあつと

更くと祢宜の斬や杉乃月

日出く坐臥くくむく小舟く字  
宿より毎東波くくやく遊の月

維摩の讃

山にこい大衆なりくを床乃月

張良圖

曾中の兵いこく子く此月

布袋此月と掬れ絵子

有くちあき水の月く瓜はく交

閑倚橋

猿這ひ子系くくんとや橋れつ記



寺にありて葡萄園膾ハ 羨み子ありん

小野川掬投子餞

八月や琵琶と笛ふをき先ん  
あかきく猿の歯ふし山峯に月

契不逢恋

国に火牙ひのふ坐臥や社の内を

病中制禁好

橋桁の串海風そつれや月此友

遊子

いさめなる松の阿もはる月

乃啼やう弛放るれく昏の月

玉津島帰望

つこのふみの更井此月を懐るくの

燃杭有火をいつきやれき月夜に

庖丁の片袖くくしくの

月のささる詩の舟々山市川武々

若拙文臺之記

りあ月もあらしに橋を朽目うれ

仲磨画賛

月影や舌を帆子まなく三々五々



月をのこれ越路の小者木曾の下女  
ろ子なりぬ波子米守るる御妻

満百

あり阿婆の月尔な里しより母乳乳  
在明や待来なるの君と伯父

所思

いさくも心はくしや十四日  
待宵やめをき二見へそ者月  
本母も可おの會ありきあめ  
鳥帽子屋ハ急海しきえよあめ月

雨

約とめく金買部りきぬら  
川とあまの罪屋ハいりあめ月  
納屋子何雨いれてけあつた

合秀亭

富士系入日波を輝やうあめ月

琵琶川をよむ

五あ酒を飲く出くき婦の月

所思 哀あめ

いさくも心はくしや十四日



夕汲をうぐえて見んぬも梅の月  
鯛も花も江戸子生れくまの月  
ましらや年のいさねもあつた月

文畧

位高ぬも老る子ありきやれり  
酒くさよ鼓くちも繁るものつき

海素子の弦子

おの事あまうを誰月見舟

得蟹無酒

舞の画く産ぬ這をわらん哉

人言や月見とゆをふし草

風雨

雷牙揖ハなひまそ月見舟

布袋の画子

月くも杖りつあけぬ小舟ぬ

平家落の邊風尔

宿たぬれとく被く出し月見哉

て川をん子丸盆おひく月見舟な

一休の狂詠自画を写して

律師沙弥お判哉くあ月見舟



上文語上

平家なるを太平記の八月も元は  
娘ふも丸まを〜能を丹見の乳

僧と坐あは〜

小便牙起るも月哉 又さうり危

名月や身その〜人子松世の事

名月や住吉乳 住く田志の

名月や吾酒のまんと頼りおる

名月や味をさ〜むるま〜

名月や金〜公子の 百世友

名月や〜る〜ま〜 袖儿帳

三日糧をつ〜む〜

名月や十安子 銚を握る〜

柴ふる〜

名月や〜る〜

名月や人を抱き 膝〜

鐘 壺 容 船

名月や席堂の大鼓の〜

名月や出〜も筆子 筆〜

名月や〜を〜の〜



閏十五夜 前の十五夜江戸ありき  
海番危ハ照月をえきく後河し舞  
待乳山

とそ満里掉走ふらん千のふ鳥  
松前の子やあつ

こさ吹く大根とそそ中味の月  
宗国先月をうゑの句をとり

芋ハく 凡僧却走ん 二百貫  
君といひきんと云さそく弊るあ

物あふし青豆うさり 種走つ

いささひや竜眼肉のあつこい  
十六宿ハ儒者と名ふし姿あり

あさりの童子扇とそ画子  
桑守の心ゆれそ如 栗の月

山川や赤と急子 隼とそ  
みの栗子 袖あき楳のねり

栗と賣の舌関へのふ 栗をく那  
あさひの上み後 志子 兵太即子

三栗のうそありうもや 角 被  
生栗を握つらん 山 踏 小



如是早のころを

二子山あつこ子むらうを栗のころ  
泊瀬女牙村の志ふさげ思ひきり

山差我遊吟

法庵や志ふ村らをもあつこ

露香月灯を憐

古寺や法庵ふまんころを

後府出番子揺るまへん

たうへ糸綫拭ころも木浩桶

市所柄やころの蓮さきさげさの霜

同来の推ひふ里志松葉ふあり

月日此栗嵐葡萄あつこの甘露有

子亀の袖此葉子のし白ひくれ

南天やあつこ実海やれ山のたぐ

南ては実をつて免と雁志色

南天や妹波の戸へ紅小倉やま

子守りふととあけく夫婦子

あつこ葉ハ思ふ葉子とて秋菓

種竹三竿

味ふくも許由くひきとまこ志し



茸や法幸のあはれに眉つゝ  
茸狩如山志阿あこ子虚骨病  
たきありや鼻乃先を象ああり  
松吟屋の庭子さの燈の土を初り  
うつゝと落手松をくせま、可  
りくをん中尔志海初け有  
りも志そ都志土や木乃子狩  
松の香を忌と吹あり法く茸  
鳳来寺の山北邊をさる時  
冷泉の珠数りつ寄る茸 五郎

松の蒸尔と此火先を象落茸油  
川茸此香牙をありや 水  
稲蒸見子 女待そんを川  
以てこや敷をぬきれ 芥菜の中  
な其基尔 稲下と志を手織る  
いつしと身以を于んぬや大井川  
稲塚志戸塚尔つゝ 田守の那  
あはれをの卵うをく 落穂哉  
早稲酒や稲荷をぬ出寸姥りのを  
足あ少ぬ亭主尔とく 新酒かち



太郎二房の貝をさつて  
かき出せる貝もさつて新酒式

横儿追悼

一漱を手向牙とさや 新 糴  
こころをさつてさつてさつて  
新 糴 子 北斗をゆきよひり  
茶のうきもさつてさつて  
生 孫 とさつてさつて  
阿 彌 とさつて鹿もさつて  
七十乃腰もさつてさつて

雞の下着つてさつて  
いまだぬきぬきの  
さのうきのさつて  
駕もぬきぬき  
志もぬきぬき  
北何うの従者短冊  
古器の手もさつて  
さつてさつて  
さつてさつて  
さつてさつて



雨をきく地ふ 這ふ菊を先折ん  
こい誰子るの 折るうせむ 代心きく

昼菊

起くふく 蒼ハ後りか 折る重

素堂残菊の會子

此きく子十日の 酒乃 亭主あり

菜菔

菜菔をきく 折るあつるも 折るん免

病起 千山より 菊と吐く

大母衣のりし 終我押や 瓶のきく

三鳥牙と重陽

門酒や 三鳥牙は 菊枝をさ

宮川志をり子 酒送らきくれく

重箱子 花あふいし 菊の折る菊は

みちをのり乃 菊あわさるる子

いふ我七百 折師走 菊牙は舞

外苑のやと 折るたふさく

出世者の一り 菊のり 菊

時服を 菊めらきく 菊色うな

子と折るく 歌人折必字 志のきく



袖の浦とつゞきつゞき

白菊哉 貝珠実尔をん 種乃ら

はまききく西行の圖尔

業をそめて日くちされくち方し

女の子哉ねくひくまうける人尔

か子屎尔らうらふ 蕊せん 妹うぬ

親を菊十日のそく哉の子く

震真の雛りもかきな 菊 贈

未曉陰

鏡つよよ 此子にまきく 兄る業ハ

翁とひ業の 文む可 任をくり  
筆毫のゆれをたうやうし 園の菊

子家の落大百菊の條情

業と中ふきく 尔詩人の 質をく

袖の色や 起あうりく 花三米の香

きく此酒 蒲萄のうり子 志く

内菴風虎十三回忌

菊の香ぬ たらけをれぬ 服さし

九月九日 扇を指ひる人尔

きくやみも 星く輝く 礼あふ



茶花饒別

友成身茶花使平播戸まそ  
手入のちさくし西系結くむし菊  
産寧坂くくろそ

菊紅系多急野くもあつり危  
起くりち水やけきく流るめり  
水鼻平くさ免たりけさきく 施

丑と月尺きくろそ

痛く種ぬい雨元政の十三夜  
うきくさや江尻く三穂乃十三夜

志のそとむ茶師身扶森の十三夜  
茶研ても粉吹おろすは月  
後起く上のち子き雨夜、  
のち乃月確のきくろそ日 傘  
白鷺の甘巻ぬくやう尔後の月  
いつきも古のそくろそ  
後の月松やさぬく 江戸結庭  
さく子をとふくくや後の  
家こあの木まもきく 結ち乃月  
移むしの身と栗平鳴ときくろ



住の邸や軒芝を過ぎて浦の月  
白玉可等張と文も如 滝のつま  
やらぬ月 秋を掛たのきく木挽早  
漬蓼の穂子出る月 秋の糸  
笈に葉子 古のよきよ 月元哉  
此は宮の良材とて存まうく  
大工連の久しき顔や 神世殊  
御舞子まうく奉りて  
此穂をうりて散らあるまのかがし  
内宮法殿の遠拜なるを

月の秋や赤子もまのれ神臨山

外宮

日ハハと纏く古殿身 雲力の果るん哉  
ちこや小判ちんく 菊の花  
毛津川あき  
ふよよの祭主の輿を送り  
二月堂子系りけるに七日断食死僧  
堂のうさく 行ふ声寂すて  
日の目見ぬ 帟帳もて 柵の那  
かのちりく 髪を簾に掃く おるん哉



戸越山庄

むくおきふ北任の美とほくく白く乳  
谷へつあ 蒸みまゝの紅きふかり

三条橋上

片腕のみやこまのこす おきふのね  
りもちみいたうをうんく酒のかん  
山姫せん深のうう流をそまをもちうれ

宮根

杉みくへふるそふくまある村のき  
りもちらんう公家の子達うまのき山

道役り紅きふくちありささりの水  
のましく胡熊の拓といふれきり

大山

腰押やあきふ山根せん下りもち  
山あきくころねく面や神をもち地

新殿六間港

あつらぬ葦のうく免や下紅き  
争のつらぬ世やまありて岩まつ  
木葉の食 蘿を扶せんめくきか  
この風情 狂言ふもく 葦みくち



う川の山乃弦子

及の角栴沓ん若るり志る純々り

霍う岡古樹のりやんく

阿の代の供奉の扇やちる銀杏

遊弘福寺

木犀や六尺四人 唐 糸の尻

うら枯やころも餅くふうのやま

餞お長上京

うらのきこ花のたりとや 女を純

白扇倒懸東海天とくへる句をつこ

け頂有射くこ子極くかんちをく

糸雲の西千けく金や普賢不二

洞房の茶屋字兄生あ苗を好くく

うきさる誠悼く

とあしや笛みくめ千を塗土足履

見し月や大くこを純く 九月 尽

吉野山あききしん

頼政あ月かんこを純く 九月 尽

怨国離

傾城あ小あまのちあし 九月 尽



尸鹿虫とまごりささくく我より善

九月尽

藤姫お松尾のうま妹を師走哉

下  
一  
三  
三

冬之部

神無月あつた花月まの雪ま  
さ砂や祢宜の師治の神無月

玉津島あつた

高野あつた

高野あつた

卯塔あつた

東河六祗園

揚弓子あつた



神世振酒匂身橋し葦子多う  
家々の留至石らるるなり 大社  
あまきけし時自らるる親乃鐘の音  
響かす守片日ありや響ししれ  
志くくもや葱臺せん 一のこ 柳

遊金閣寺

八尋松楠の板戸残りる志くれ  
葉をそそく 響くそすあ夕時雨  
起く志く連之端の道道米らり多う  
釣橋せん夕日尔ふれ北志く連

芭蕉翁病床

吹井ら申 鶴我まひらん時自が  
細猿の引志はくふ志く親うれ  
時自疲松私の物下あしつかきり  
阿南の川をふるにあら酒のえんとも人子  
志く親来る 酔やのころきく 起くそえ  
當麻寺 葉の流せき

小お思くく人とき方子と家山居る水  
松陰志く 硯尔息を 志く親 一の  
元天の飛渡 西河の志く連 へあ



本多総州公子侍坐しける松村雨と  
し〜く蝙蝠の鳴き聲をきくありに  
蝙蝠や柱を捻く〜外一志く〜  
守山の子子りり哉昔時鳴る白うね  
夏より〜ん〜め芝居お〜  
笑、ぬれ朱唇さ〜〜し〜  
神鳴き〜あ〜し〜あり〜 雲母のち  
今態を志く〜〜以て阿連〜

國阿の狂

象山ハ足跡ゆ〜〜く時雨の那

〜我子〜あ〜あ〜か〜き〜のま〜  
志〜〜あ〜〜 廁ま〜  
か〜〜人色〜山出〜  
鳴〜茶錢中〜  
松原のすま〜  
〜狂翁後集の記

同年忌子三句

志〜〜あ〜〜舟跡を墓とのぬ〜  
七〜〜志〜〜や〜り小〜〜



辰霜や 鳳尾の印 忠を礼よりも  
遠く心や 自刺子こころが水よりん  
久き畧

風子世牙 幻ろくまぬみ形し 栗  
このりしとあり好脆年のうらも目  
あうししや 沖らんまきふにれこれ  
風牙 氷が氷もくぬや 狐心 尾  
木枯や 樹多此小橋を 若も 満  
曲翠しく 幻佳と危のあふれ尋る  
まの海もくもすふぬ嵐乃木系る子

志ししとまや 枯木の夕つく日  
うらひとる三井の二王や 冬木立  
冬木立いつれしや 山のたつこころ  
西並山のまらめく

画譜

かすきりの尋常可死好 枯蹄 うれ  
松一木を食の松葉のかまき形も  
捨人やあふくうらう子 冬木立  
色蒼を海をえん送るうら  
あかき足居くそと速やあくらも紫



三日月のをくく 記ほし 弁 玄 措 式  
何れかのあゆく 市流 頂 戴 の 一 一 一 一 一  
あきあきの下 秋 冬 春 夏 秋 冬 春 夏  
冬 春 夏 秋 冬 春 夏 秋 冬 春 夏  
くろくろの代り 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
帰花 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
生 活 新 年 上 系  
緯の本乃 扇 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
坊主小 玄 清 小 玄 素 の 道 心 乃  
帰 花

口切や 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
煙 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
新 豊 老 父 七 十 の 契 子  
玄 川 玄 浪 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
埋 火 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
埋 火 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
閑 居 安 慰 心  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃



火燧のうらうら 藤替子志業を枕と  
 用防とのちたある人めく 海軍行を  
 くる子一生非なりいなきとめく 板倉  
 とのし中しるやひ中しる 鉢状拾ひく  
 赤くしる青紙の錢と初らひく  
 松の色や 髪子富士を焼 西巻 形  
 俣子短く一煙の散茶 糸束あし  
 さるしるいひくしる 糸任 何しるしる  
 片手打落し たる火練と 幸此物成と  
 忠度と 灰りくしる 火鉢の字

山もたて及しつし 壺し 二れ子射志く  
 炭く 壺子鏡のぬき 一し 手標成  
 たるし 焼志ひくし 所あるん 壺のきり  
 山麓電や 鏡本 糸井く 朝此末の  
 炭賣や おおるやん 法水 鼻をえん  
 すし 加し 煙 越ぬき 一 猿のあし  
 かく 山麓も 所此 木糸あしり 糸あしり  
 炭屑平 いやし ありしる 木葉成  
 新宅 十  
 糸の場乃 小 壺 貯るし 山麓 俵



とてちあうかの一車 ちれおとらん  
茶の幽居 山彦の黒人を 佗名之  
蛇のうらき貝を 盃めく都多と  
名つあうあうを

炭くうとら 炭こともあま  
志炭割く 火箸を 芥せん 幽なる  
表えひあう 十九日ううあう  
夫あうとせうたあめく  
酔さあんく 大黒出ん 夕あふす  
まね板牙 小判なまきと 夷 講

出差我山や 都を 酒志えふす  
打益牙 鮎もあはれあう 笑う  
法香子 光傍 春色く  
源氏もや 季吟の家 死 堀子 傳  
福天の 床机 牙とあは 仕切帳  
子ハ衣 碧 親もつとあう 夷 講  
幻何菴 有く

新巻  
崩りの屋あてあうらん 冬 心毫



落のたうそを根う急おきあかま  
はくしと恐るん 兎や子ああり

霜月朔日の例を

張入也 嵐芝存紙 冬こもり  
顔えせや 曉いさむ 下 邸 摺  
何あらん 藻魚ささふ 冬ささる  
果さあ 二冬あられく 系忠夜  
帆か船船あきや 堅田の冬ささ  
此本戸や 鎖のされく 冬此月  
山多此家あめさ 冬月ささし

大張んん冬此月あき夕納涼  
冬川や 筏あすり家 冬子の原

住吉あき

冬此月あきささるり流さあ冬の流  
増あれてあきささる人冬乃 壺  
冬 厩

冬持の足下を 冬あきんあきさあ  
冬あきい 冬山子にささる鳥さ  
冬あき乃 冬子あきさ、冬あき乃  
冬あき乃 冬子あきさ、冬あき乃



むうしせし〜遊の室舞や残  
紙子着てわさお遊もあり  
あ〜ときく〜アモ紙巾の  
目〜このりきまきま〜紙巾の  
朝あ〜馬の目〜つ  
あ〜お〜事志〜道也  
持入〜め紙切〜火  
大町新巻  
水仙や鉦は〜の小  
あ仙〜あ〜あ〜あ

柯求老人の手向

山茶花や 鶴の舞〜あ

對友

肉〜肉の古酒をぬ〜如  
困〜り大〜め〜きり  
胡舞せん妻やひ〜〜紫  
玄賓を世子見紙は〜干  
市及場ある休め〜り大  
お沙その先〜紙〜大  
日本の風呂ふ〜〜比



世中の川 其をきくしやみあふき  
かふけやおのうりももと朝のま  
秘さうが 錦北かきもや筑戸 汁

文畧

茶の湯めをゆへとてあそひけ  
茶の湯めをゆへとてあそひけ  
茶の湯めをゆへとてあそひけ  
茶の湯めをゆへとてあそひけ

遠水三十五日

おろふ哉はまらぬ 納豆汁  
つと強り 鬼の耳を引たくを

金露のおろきとくろる霜の声  
髪のおお木賊を一夜拵 牙より  
滋楽燵の火洞糸あそむ糸のあ

貞佐新宅

此宿を夜明けもあつて 杉乃霜  
酒らさぬ浦 剥きりおのく急  
妙身童女を葬る

霜の鶴玉牙あしんも 被るま  
宗隆尼みよるをいあま

築子逢ふくれ命やせこの霜



野のさる乃藪陰尔提の音けりん  
鉄鍔治牙 隠者たの山子ん 畑の露  
その露子何とおらうそ舟の中  
不草の鳥もかきさるや 水花を  
播河の僧とついで  
栗めしの焦く白ふや 霜花を  
あまの雪くかくさるいさけ 露の蟹  
山犬をさるう 噴出守 志をたぬる  
樓死子白ふのつらや 露の菊  
ふきこもれ 柗の忠告 七日 市

みそ種めも角ハるらんり 流せん

宿僧房

あゝ道ちう 閑伽の折あふ 冬来成  
名次へあゝ種とさくく 長柄うぬ  
武家時や 富士の露乃 出きさる  
海へ降 雨さきや 雪年波の音  
みさう乳く 木城子 流る あゝ雪成

市川三升と祝す

三河守や おらうそ 氷くぬあふ筋  
滝幅や 氷の中 糸 みさる松



閑侍橋

うのひや 鐘長わが家 橋はくは  
孝凍や 簀子能余の うのひや  
長尾刻付くまじし人志をの月余  
酒賣不許入内くまじし  
水乞の 綱子もくまじし 水柱の如  
柳多く弓を越のし 憲清を  
爰なる海多し 隣家子能をのくまじし  
たうまの城乃まはれ 吉野 山  
使者ひらり 多城人運多くまじし 武

父の医師たれも戯

純汁子まの本草のくまじし  
河豚あま水死あまらぬ 下河原  
人妻あま 大根くまじし 汁  
生薬をくまじし 汁  
世中子 舅 河豚あま  
あまの浦あまらぬ  
純汁子まの本草のくまじし  
あま汁也 祝言のとれ能あまらぬ  
妻あまの 飯あまらぬ 小お 衣



鉄炮の心そ種し切くてもあつと汁  
手と切くいよく切くし純の面  
詩人由るを松江の飯といふらん  
徳子ころの春し魚子ありす雪の飯  
鮎鱈をとりまけは運ハ厨の那  
足袋ころりやとむさあれと子子  
蛎あまのやあまのあまのあまの  
鯉のしりしりしりしりしりしり  
梅津某秋田へおぬがを送り侍る  
ふくよ春のあまのあまのあまの

細代守

細代をり大根めぬととせらふんたり  
阿しゆや下り心志屋せぬ 子石 山  
後無曳ぬきとひし大や竜田山  
大川く豆腐持ゆり甲松無  
給意結松糸ころりあや三穂の海  
市隅の侘人子  
宮 善書屋をくくし ちをれと 矢倉賣  
貞徳三羽五十年忌  
常くともさきたらぬの昔か京  
霜月廿七鳥候千黄門光圀卿之御茶



真蹟湖山之佳景

硝子の茶屋

水の工と醉龍津〜水茶屋

清水寺音羽

振精舎 稍や子と云 吾はつり

耕作の茶屋

根深く 麦の早苗や 河如免子

黒木の茶屋

我や 紗牛年 雲 咲 黒木茶屋

藤棚

若昔やあ〜種牙やや 不破庇

西行堂

炭や岩間あつ〜の法あ〜と

唐橋

長橋やせこいあひんぬあ〜の松

八つ〜の志乃のぬ〜を死〜

坊主かき月も涙も 河川 水

河原書院

八子代〜を河原流 飯せぬ子

西湖



詩と阿ふ家ちううん言の標小舟

右十章

越後屋の鼻舟盤るこく小舟ちうう  
啼らううとくぬ取ぬぬの多おろく  
むく子多とぬ夜ハ多うし虎う許  
心とぬ全牙ゆぬぬ浦ちうう  
浦子多ぬぬとぬぬも大針鳴  
毛ぬ撥ぬ投くたぬぬいぬぬ  
ぬぬぬぬ子月ぬぬしぬぬぬぬ  
妹う手ハぬぬ足う小舟ちうう

下 四十七

大丸講月次

仲の帆も十のこくぬ濱子鳥  
水舟も蓋とちうう 鷺の中  
子石も鷺おはくぬり新安吉  
滝口やおりのぬぬぬぬぬぬ

夜学感

鷺ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
初屋の介子鴨の毛をぬぬぬぬ  
鴨ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
志ぬぬぬぬ猪ぬぬぬぬぬぬぬ



燕一重くうさや乞食のぬくえ鳥  
めつれしや鷹うさうぬり對る船  
あやうらう人子案内し

意深しき船尻あけけり  
町神楽店あひうきとあつし  
ひらききれをいふあし思ひを移す  
たきしぬる縁組さんて里神楽  
新神楽や鼻息をうき面のうち  
うらやまや犬のつし出に杉並  
神楽身は小便を何や川邊

智恩院町ふやうり

ちのねまよふ赤音うら乃妻のま  
神楽身人ものぬり伏えあ  
は川雪や赤子身とさる胡  
初雪や 雀乃扶持を小玉  
ちのゆきいふ盆ふりまななめ  
神楽やうらまぬさうな人ま  
あつしぬをれう障ま守娘さ  
人まあぬおの弱船  
ちのゆきいふ十はあつ子の満の



或は方より雪もん子連るせの  
御をり物やえく神く舞る  
楠の銅臺四間平一男とて也  
唇越るお母を

その雪もゆゆのそ所を 大

市中閑

はの雪もや門牙 梅あお夕月  
雪買子二雪をも結る也 勢此也

清水修行子とてかて

雪のしたき雪の舞舞巻の日の気

下 四九

雪此日や船歌とめく 暮るんを  
る士牙 雪もきいあ 雪の宿

寒山の賛

森る懸子門の雪もくも良くな  
ふ雪もおり人も睡し 雪のそん  
門のふ字をたけく

馬の山灰さくもハあき雪の  
雪の跡もくも世波もあす雪見也  
色も雪もをてとて

表老の 此雪もあき見 暮るんを



官城御普請朱就しくは徳家は慶美  
孫のりくまは

陪長を朱買臣あり 由平の袖

山名の子

雪が汲く様う茶と煮たり太山寺

加も川平ひしむきしをえりて

釈迦しよふ改も雪の黒木くれ

醉吟

雪うもやゆり子とくす小忌衣

戸障子のききと雪と松たこゑ

望聖觀山

薄ゆもゆ大か字括糸山の字

かしくもや赤田へこのる雪れき

遊女土佐をむく人さうしくぬて

黒塚のやあしらひや園の雪

りやまも川とゆきりあり

半袴の河崎もゆりや雪れ松

鴨川も鴨を鉄輪舟雪見え

軍兵越山登てまのや雪つり

まのの雪北登りて下り危



前より字めく雪の句

麴覧の人ふなりゆくまふの雪

出口ふく

さぬくし子大張らるあや袖れ雪

すくくあつとふ小あを白れ歌はて

おのめや捨くあつとくゆまらるる

腸張塩牙さけあや雪は猿

温飢屋へゆく念佛あり夜せん男

文畧

思涙をまきしあまなり雪をんぬ

榎木君ぬくみ勝手や雪の友

雪の足もあつとくうううううう

不二の相のかいさうううううう

うくくう簡きぬくうううううう

殊男を討絶へまりのくかく化を麻ね子

極めぬく浅間うううううう

風めくあはるるあふりぬあくの雪

青藤越雪に裾ぬく丸合ね

ふ士うううううううううう

あま茶の詩とこと盧全の雪の白を



抜出しくゆきおはしふ柄ゆく  
雪ありのうねのかきし衆子みそさ  
秘蔵の鞠のきりぎりすをめぐり  
黒染子ほり吊や 雲うめ  
新あそびや日置うさぎ 酒の味  
雪にまぐさかきし蘇鉄の女あり

雪窓

換料の史記も師走は常る旨  
出しは何と酒走の巻 極  
今年も師走は菊も麦もけ

大小の嘘 元禄十年

大庭を志<sup>四</sup>流<sup>六</sup>く<sup>八</sup>く<sup>九</sup>霜<sup>十</sup>海<sup>十一</sup>走<sup>十二</sup>式  
新あそびの小坊主も師走は常る旨  
妖らう<sup>三</sup>狐<sup>四</sup>ま<sup>五</sup>川<sup>六</sup>志<sup>七</sup>走<sup>八</sup> 師走は常る旨  
不<sup>九</sup>分<sup>十</sup>當<sup>十一</sup>春<sup>十二</sup>作<sup>十三</sup>病<sup>十四</sup>夫

酒ゆきし病をさかす家志<sup>三</sup>う<sup>四</sup>め<sup>五</sup>式  
新堰あそび食くらふ屋うし師走は常る旨  
雪かきし親衆格<sup>三</sup>も<sup>四</sup>志<sup>五</sup>う<sup>六</sup>め<sup>七</sup>式  
山陵のきりぎりすも師走は常る旨  
子もも川加茂川あそび師走は常る旨



こしくくろ森えいやくしそちたき  
伊勢橋をよせぬを満く 鉢 鼓  
あつ川支の筑波ふるやきとを仁  
寒会佛抄をこゆれそあつてつも  
何飯を 飲酒をいの子かん好の  
南の年あまへれた  
冬もあや 南大門を 水は 月  
並にあひひくこの灘や 冬造  
極寒  
きためあのみ送精もつし寒の水

漫成五倫

君臣有義 家の子もろくをこころあふ年わかれ  
父子有親 純けや情を娘もあふねく持し  
夫婦有別 絆打めをこしおぬもあふ送形り  
長幼有序 その月と娘の子にも精うけ  
朋友有信 君と家娘の子に誠のす志あふれ  
極月十四日西吟大坂へのあふ子  
つそいやは足代を賣子あふうはせん山  
節季のや口はさつさあつさし  
元日を起とやうあり 二節季の



所季ハ九能耳尔おのり  
煉くぬく麻の教を女房のり  
まゝとくぬく麻の教を女房のり  
忠信、芳野、志まふや、煤、拂

閑窓子羽帚とめり

煉くぬく麻の教を女房のり  
鼻洗掃孔雀孔玉や煉くぬく麻の教を女房のり  
辰く物子ヤす

まゝとくぬく麻の教を女房のり

餅くぬく麻の教を女房のり  
餅くぬく麻の教を女房のり  
餅くぬく麻の教を女房のり  
餅くぬく麻の教を女房のり

震威流火志門下りて

妹々子や薑やまゝとくぬく麻の教を女房のり  
女子瘡瘡くぬく麻の教を女房のり  
餅の粉や花雪くぬく麻の教を女房のり  
弱法師くぬく麻の教を女房のり  
くぬく麻の教を女房のり



多くと松守より市に夕阿し  
柳花より中るとの年がられを

行露の万句出無の巻油

第代の人紙阿も危神楽帳

揚屋子酔房して

悪の年差紙菟をさくさく

詩商人年紙貪ふ酒債の船

いさくさん年紙酒屋の上はたまり

ゆきしも板戸めくは餅の紙

ゆくさく糸垂とらん鏡と

座右銘

行年や壁よりそらそらかき

ゆきやも船評定教のまき

やうと通くも狭道とくゆ

行幸に年あはくは年乃く

小傾城ゆきあはくは年乃く

悠那屋の夕日志のまき

子流りよはくは年乃くのまき

千観世のまきとくは年乃くの

年中の放下みくは年乃くの







乳母あてて志のも美女の心忘  
 午山宅あてて志の  
 割すそやハ乙女神楽男ら  
 市松寮より破戸をせかき入る  
 詠のやとあてて大慶とてわさ  
 大晦日好りてさうらう  
 聖代  
 鶴あててく日とてお母さの  
 大晦日

雑之部

十及の因り文畧

尋牛 園子新長 百系何たり月夜これ  
 呼牛 呼子さあはるまはてをきく如哉  
 隠牛 夏のちを麻あてて疝気の起り危  
 貧牛 仁朱判やとさうらうあてて男  
 廻牛 小便も見ずあてて五月の那  
 番牛 あてて暁傘をかきせり  
 無牛 さりくす枕も床を学履式



羊牛 何となく冬之夜隣をすまきり  
 送牛 何れんよりの子を陀羅尼やまの  
 老牛 まよひまこころんれんり時を  
 於冠里公各款五色梅 黒  
 思物やふれ志くるのふをらん  
 村るんさきれくしや学根の松  
 天智天白一  
 うらおきむ入麻さる 四海波

下 九十八

懐中案文 小冊

一寸案文の三葉... 種々整えたり一ろき  
ふまよあつめくる書あり

文政四年己未正月吉辰

日中橋新町 藤川宮  
 三谷町三丁目 西村与八  
 人形町通り 橋屋合助  
 两国吉川町 山田依助  
 津田町四所 小島長平

江戸書林





Small rectangular stamp with illegible text, possibly a library or archival mark.

Handwritten marks, including a stylized signature and the number '120'.



